

SONRISA

そんりさ

Vol.160



移動クリニックまでの道を住民の先頭に立って歩くハロク・ウの女性たち=「グアテマラ・セプルサルコ裁判勝利から1年」より

サパティスタ・芸術と科学

- 02 サパティスタ2016年 アートとサイエンスと運動…… 角智春
06 メキシコ・組織犯罪も警察も政党も追い出した村……山本昭代
10 グアテマラ・セプルサルコ裁判勝利から1年 ……新川志保子
12 大西洋岸開発がアフリカ系住民の共同体を脅かす…大西裕子訳
14 ラ米百景「闘士オスカル・ロペスの帰還」 ……伊高浩昭
15 ペルー音楽 映画「リマ・ブルーハ」が描き出す民衆音楽…水口良樹
17 メキシコの食「タイの白ワインソース」 ……ミゲル・アクーニャ
18 ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み ……小林致広

サパティスタの2016年 アートとサイエンスと運動

角 智春

2016年は、サパティスタ民族解放軍 (Ejército Zapatista de Liberación Nacional、以下EZLN) とそのすべての支持者を指すラ・セクスタ (La Sexta) が、華やかな活動をみせた年であったと言えるだろう。ここ数年のEZLNの動向を振り返ると、一昨年の14年は、なによりも5月のガレアノの殺害が大きな衝撃となった。ガレアノとは自治区ラ・レアリダーに住むEZLNのメンバーで、近隣の政党支持者との対立が事件の引き金となった。これをうけて、EZLNのスポークスパーソンであるマルコス副司令官は、「ガレアノ」副司令官と改名する。事件直後にこの年の活動予定が発表され、CNI (Congreso Nacional Indígena、全国先住民会議。96年にEZLNのラモナ司令官の呼びかけによって編成された、メキシコの先住民グループの集まり) との会合や、ラ・レアリダーの体制建て直し (問題緩和のための市民による視察制度の導入、学校や病院の再建設) といった方針が立てられた。同年9月にはゲレロ州でアジョツィナパ師範学校の学生46人の殺害・失踪事件がおき、EZLNは被害者の学生やその家族と連帯する活動をはじめている。

翌15年は、ガレアノと哲学者・故ルイス・ビジョロへのオマージュとして5月に集会が開かれるとともに、「資本主義のヒュドラに対する批判的思考 (El Pensamiento Critico frente a la Hidra Capitalista)」と題したイベントで、メキシコ国内外から集まった研究者・思想家による意見交換が行われた。これはのちに全3巻の書籍にまとめられる大きな催し物であった。約1年半開催がなかった「サパティスタの小さな学校」(Escuelita Zapatista) も、本来の村での体験学習型から、オンラインでの進級テストへと形を簡易化して、7月末に実施されている。

このように、比較的落ち着いた雰囲気での活動が多い過去2年間であったが、これに続く昨年16年は、活発で明るい印象を伴うような内容の行事が多かつ

たように思う。「ヒューマニティのための“コンパルテ” (CompARTE por la Humanidad)」というアートの祭典が7月末から8月にかけて開かれ、続いて10月にCNIの20周年記念式典と併せた「第5回全国先住民会議 (一期目)」が召集される。直後、CNIは、メキシコすべての先住民グループをメンバーとした先住民統治議会 (Concejo Indígena de Gobierno) を組織することを目指し、そこから1名の先住民女性を選んで、18年のメキシコ大統領選候補者とする方針を発表した。このニュースがEZLN・CNIに対する関心を多くの人から誘ったためか、12月の「ヒューマニティのための“コンシエンシアス” (Las ConCienias por la Humanidad)」および「第五回全国先住民会議 (二期目)」は、年間の他のイベントと比較して、参加人数の規模が一層多くなった印象を筆者に与えた。

筆者は16年のこれらのイベントすべてに参加した。本記事では、このうちとくに、EZLN主催の二大行事であった「コンパルテ」と「コンシエンシアス」について、筆者の所感をまとめてみたい。

コンパルテ、コンシエンシアスというイベント名には、サパティスタらしい遊び心が効いている。コンパルテ (CompARTE) は、スペイン語で「共有する」という意味の動詞Compartirの二人称命令形 Comparte=「共有しよう」と、「同志、仲間」を意味するCompa、およびに「アート (芸術、技術、学術etc)」を意味するArteを組み合わせたもの。コンシエンシアス (ConCienias) は、「～とともに」を表す前置詞Conと、「科学」=Ciencia(s)が組み合わさっていて、文字列全体では「意識、良心」を意味するConcienciaも含意されている。

コンパルテは、「アートを実践するひとならだれでも参加できます」と呼び掛けられた (EZLN公式Webページ“Enlace Zapatista”の“CONVOCATORIA



16年7月30日、CIDECI - Unitierraにて。最終日の特別ゲストとして、オベンティックからサパティスタのアーティストが一組招かれた

ZAPATISTA A ACTIVIDADES 2016（2016年の活動についてのサパティスタの告示）”参照）。

7月22日～28日、30日はチアパス州サン・クリストバル・デ・ラス・カサスのCIDECI - Unitierra（Centro Indígena de Capacitación Integral、先住民総合研修センター）を、29日、8月3日、6日、9日、12日はそれぞれEZLNの5つのカラコル（Caracol、EZLN自治の最大の行政単位）を会場とし、前者では国内外から集まった一般の人が、後者ではサパティスタのメンバーが、アーティストとなってイベントをつくりあげた。

CIDECI - Unitierraでは、施設内がいくつものブースに分けられ、複数のプログラムが同時に進行していく形式だった。音楽・絵画・演劇・大道芸・ダンス・詩などに加え、版画や曼荼羅を描くワークショップや教育改革をめぐるディスカッションなども開かれていた。

カラコルでのコンパルテのなかで筆者が参加したものは、7月29日のオベンティック会場のみであるが、こちらは、絵画が飾られている大きなステージとその前に広がるバスケットコートにおいて、音楽・ダンス・演劇・詩などが1グループずつ順番に披露された。『軍とパラ・ミリタレス（準軍事組織）の脅威』『EZLNが来る前の村の様子』などと題された演劇、トウモロコシのオブジェや農具を使ったダンス、「女性がいなければ、革命はない」と叫ぶように歌う15歳前後の少女たち。

自治区の壁画や音楽制作など、EZLNはアートとのつながりがもともと強い。今回のコンパルテは筆者

にとって、彼らが提示する「運動におけるアートの役割」を深く考えなおす機会となった。

サパティスタたちをめぐる状況は、穏やかなものでは決していない。彼らがみせたアートは、殺されたり連れ去られたりした仲間たちに捧げられたもの、外部からの暴力を描いたもの、土地や水の利権を奪われた経験から生まれたものだ。歌や壁画に込められた、「自由」「尊厳」「革命」というキーワードは、そういう状況から絞り出されている声であり、それは明るさや力強さだけを持っているわけではない。

筆者は、コンパルテの約半年後に、別の目的の視察で、ラ・レアリダーのカラコルを訪れたことがある。自治区の近くを横切っていく軍のトラックや、以前ガレアノの殺害事件にも発展した某政治団体との対立問題など、緊張する要素の多い場所である。その場所で、EZLNのメンバーの一人が、「同志を殺されてから、歌を歌い始めることにした」と言っていたことは、前述した「運動におけるアートの役割」への問いに再び筆者を立ち返らせるきっかけとなった。

各々の心に映った世界の表現であるアートは、「みんながいる場所に見えているもの」と比べて不正確とか曖昧、とは全く言えない。むしろ、このラ・レアリダーのサパティスタの経験のように、生きているひとの一番生々しい現実を切り取ったり支えたりできるのはアートかもしれない。

筆者は、自分がサパティスタ運動に積極的に関わる前、「アートは、弱い・甘い・間接的な効果しか期待できないようなアプローチ、としか捉えられかねないところがある」、と思っていた。たとえば、目の前で人が迫害されたり殺されたり飢えたりしているとき、「アートには何の意味があるのか」という問いが一瞬にして生じることは、当然だと思う。

コンパルテが開催される約1カ月前の6月19日、オアハカ州で、教育改革に反対する教職員のデモ行進中に、何者かが発砲し、参加者数名が命を落とすという事件が起きた。これをうけて国内の雰囲気は緊張し、抗議運動が激化した。EZLNもEnlace Zapatista

を通じて直後に声明文を出し、当初予定していたオベンティックでの連続1週間のコンパルテを中止する旨と、EZLNのメンバーのサン・クリストバル会場訪問を見合わせる旨を告げた（この知らせはイベントへの参加登録者全員へメールで届いた）。彼らの参加を取り止めることで節約した交通費や宿泊費を、教育改革反対デモを行う教職員たちへの支援にまわすためだ。実際にこの時期、EZLNから教職員団体CNTEへ、多くの物資・食糧が寄付された（Enlace Zapatista “EL FESTIVAL CompARTE Y LA SOLIDALIDAD（祭典コンパルテと連帯）”参照）。社会運動においてアートはどのような意味を持つのか。社会運動にはいつも、「実際的な効果」が期待されている。

そんななかで、つねにアートを運動の盛り上がりにつなげていくEZLNの知見とバランス感覚は、蜂起24年目を迎える成熟した組織体であるからこそ出てくるものなのかもしれない。考える土壌をつくる、あたらしい空気を醸成するということが運動のひとつのゴールであるならば、言葉にできないレベルでひとの身体や想像力に働きかけるアートはとても重要なテーマである。モイセス副司令官は、イベント中にこう語っていた。

「私たちサパティスタは、たくさんの想像力を生みながら、注意深い視線によって読み取りながら、耳を傾けることによって学びながら、実践を重ねながら、アートを究めます。

…私たちが望むもの、私たちが考えるものは、新しい世界、新しいシステムです。すでにあるもののコピーでも、すでにあるものへの付け加えでもありません。

これが問題なのです。というのも、どのようにすればいいかを私たちに教えてくれる本やマニュアルはないのですから。それは書かれていません。それはまだ、想像力ある頭脳のなかに、新しいものへ眼差しを向ける準備の整った目のなかに、新しいものを聴き取るための注意深い耳のなかにあるのです。

…私たちがこう言うのは、私たちの自治が、そういうやりかたで改良されてきたし、そしてこれから

もそうやって改良されていくからです」（16年7月29日付、オベンティックのコンパルテ閉会式での、モイセス副司令官による言葉“EL ARTE QUE NO SE VE, NI SE ESCUCHA（みえもきこえないアート）”より。筆者試訳）。

そしてアートは、見えないものや聴こえないことをどこまで見るか聴くか、という受け手側のちからに影響される。ときにおそろしいまでの伝播力・憑依力をもつメッセージを、しかし非暴力のしかたでひとのあいだにつないでいくアートという方法は、武器を持たないサパティスタたちの姿勢と一致するだろう。

コンシエンシアスが開催されたのは、チアパス高地が冷え込む年末年始のことだった。あいだに「第5回全国先住民会議（二期目）」をはさみ、12月26日～28日と17年1月2日～4日、という日程であった。会場は、サン・クリストバルのCIDECI - Unitierraである。国内外から「科学者」が集まり、各ブースに分かれて講義を行う。一般参加者の受講も可能だが、このイベントの「生徒」となるのはEZLNのメンバーたちだ。5つのカラコルからそれぞれ50人が選抜され、計250人のメンバーがサン・クリストバルに集まって聴講する。各講義のあとの質疑応答に参加できるのは、このサパティスタの生徒だけだ。このように「聴衆」と「サパティスタの生徒」のあいだにはっきりとした線引きがあることには、注目すべきである。

授業内容は実に多様だった。一部、講義タイトル



16年12月26日、CIDECI - Unitierraにて。一講義の様子。前の席に座っているのは、生徒のサパティスタたち

を紹介する。「科学の社会的機能」、「チアパス・チヨン火山噴火の社会的な影響」、「人工知能の潜在能力と応用」、「星は何から出来ているか?」、「目出し帽の人たちのためのロボットワークショップ」、「メキシコのエネルギー改革の欠点と利点」、「コーヒー豆のさび病の制御における環境要因」、「犬の毛の色の遺伝」、「科学の隷属—天然資源の国内市場と私有化」、「抑圧のための科学か、解放のための科学か?」

科学者たちとサパティスタの出会いに際し、会場での演説にて、ガレアノ副司令官はこのような「科学観」を示している。

「私たちサパティスタにとって、科学 (la ciencia) とは、他の要因に影響されない知識 (un conocimiento) のことを意味する。…資本主義的な数学とか、「下と左の〔持たざる者たちと革命派の〕」数学とかがあるだろうか?」。科学が諸悪の根源のように語られることがあるが、本当の科学知 (conocimiento científico) というものは、数学の理論ようにもっと純粹なものである、と彼らは言っている。「貧困を最大限に生かすために、ニセ科学が私たちを口説いてくることがある。私たちの持つ「知識ではないもの (los no-conocimientos)」について、「これらは学識 (saberes) に値する」と言うことで、私たちを口車に乗せたがっているのだ」(17年1月2日付、コンシエンシアスでのガレアノ副司令官の言葉 “ALQUIMIA ZAPATISTA (サパティスタの錬金術)” より。筆者試訳)。

ここで言う「知識ではないもの (los no-conocimientos)」とは、月の満ち欠けと種蒔きの時期の関係性といった、先住民のあいだに受け継がれる伝統的な経験則のことである。気候変動などの要因により、そのような先祖の知恵は機能しなくなっている場合も多い、と彼らは言う。たとえそれが伝統的な手法であったにせよ、適切に機能していないものを知識と呼んで誤魔化す行為は、「ニセ科学の口車」ということだ。鋭い批判だと筆者は思う。そうではなく彼らは、「純粹な知識としての科学」の

ちからを借りることで、自分たちのいまの生活に欠けているものを補おうとしている。「サパティスタは科学知を必要としている。もうそれは好奇心からではない。現実を変えたり、現実とベストコンディションで闘ったりするために、実際になにかをする必要があるからだ」(出典は同上)。

イベント全体を通じて、科学が生活のなかでどう使えるのか、ということにEZLNがとてもこだわっているという印象を受けた。数学のある公式について発表した研究者に、生徒のサパティスタたちが

「で、それは自治区の生活でどんなふうに見えるのですか」という質問を投げかけ、発表者が答えに窮してしまう、という場面もあったという。ガレアノ副司令官は演説中、“Con + Ciencias” = 「科学とともに」の意味するところを問うていた。研究者がただ知識を紹介するだけではなく、それを先住民運動と連結させようとする姿勢を見せることが、このイベントを単なる学術知識の発表会でないものとするためのカギであった。

17年2月14日、EZLNは新たな声明文「上からの壁、下からの(そして左からの)亀裂」を発表し、2017年もコンパルテとコンシエンシアスを開催することを告知した(Enlace Zapatista, “LOS MUROS ARRIBA, LAS GRIETAS ABAJO (Y A LA IZQUIERDA)”参照)。第二弾は、それぞれ、「資本」とその壁に反対する、すべてのアート」、および「壁に対する科学」がテーマとなる。現時点では、コンパルテは7月23日から29日、コンシエンシアスは12月26日から30日に開かれることになっている。

16年にEZLNが提起した「アートと運動」というテーマが、世界各地のアーティスト、研究者、ラ・セクタのなかでより深く考察された結果として、今年は何が現れてくるのだろうか。

角 智春(すみ・ちはる) 東京外国語大学国際社会学部ラテンアメリカ地域専攻所属。サパティスタに興味を持ち、2016年に1年間メキシコに留学。ウェブマガジン「みんなのミシマガジン」にて、「すみちゃんのめひこ日記」を連載し、メキシコでの生活の所感を綴る

メキシコ・ナルコ回廊をゆく2016 その3

ミチョアカン・チェラン～

先住民自治に回帰し、警察、政党、

そして組織犯罪を追放した奇跡の町 山本昭代

2016年9月のミチョアカンの旅で、さらにひとつ、印象的だったのが、州中部プレペチェ高原にあるチェランという町。この町のことは、メキシコの新聞報道で読んで気になっていた。なにしろ、自ら共同体警察を設立して組織犯罪とたたかい、町から警察を追放し、昔ながらの「伝統と慣習」による先住民自治に回帰して、さらに政党まで追い出し、そうして平和を取り戻した、という話なのだ。共同体警察というのは、「熱い土地」地域の自警団とは異なるものらしい。しかし実際にところ、ほとんど丸腰の先住民共同体が、武装した組織犯罪に対抗するなど、可能なのか？ 何かウラでもあるんじゃないか？

知人に紹介してもらったモレリアの地元記者、アレハンドロに相談すると、何度か行ったことがあるといい、なんと町長に面会のアポまで取ってくれた。しかしチェランの近くにある教員養成大学の左翼学生たちが道路封鎖をしていたりと、何かとトラブルの多い地域。用心は必要だ。



伝統的な刺繍ブラウスとレボソンを売る屋台

州都モレリアからバスで、湖で有名な観光地パツクアロまで約1時間。そこから乗り換えてさらに1時間余り。チェラン行きのバスを待っていると、白タクが声をかけてきた。バスで行くのと変わらない運賃で運んでくれるという。乗用車にほかの乗客とぎゅうぎゅう詰めですりながら、「チェランは共同体警察だけど、白タクはいいの？」と運転手にたずねると、「ちょっと払えば平気さ」という返事。共同体警察もやっぱりメキシコの警察、ということか？ その「柔軟さ」が気になるところでもあるが。

「伝統と慣習」への回帰

町に近づいたところに、遮断機の付いた検問所があり、ライフル銃を持った迷彩服の男女が車両のチェックをしていた。少しばかり緊張したが、白タクは一時停止しただけですぐに通過できた。

チェランは、人口約1万6000人、面積220平方キロ。標高約2400mの高地にある。町の中央広場で降りると、ちょうど市が立っていた。色とりどりの野菜や果物、薬草、街では見かけない伝統的な飲み物なども。しかし人々の服装は、ごく普通の田舎風といったところで、聞こえてくる言葉はスペイン語ばかり。新聞報道では「プレペチェ先住民の村」と書かれていたが、プレペチェ語を話せるのは高齢者だけで、若い世代では、聞けばわかる、というレベルだそう。そのような人々がなぜ、先住民の「伝統と慣習」による自治への回帰を目指したのか？



町の理事会。会議室にも壁画が

同行してくれたアレハンドロと町役場に行くところだ。会議室で12人の理事が一堂に会しているところだった。日本から来たということで、会議の前にわざわざ時間をとってくれたのだ。女性は3人。男性たちはカジュアルなシャツとズボン、女性たちも普通のスカート姿だが、肩にレボッソというショールをかけている。レボッソが、先住民女性としての改まった外出着という意味合いがあるのだ。

中央に座っているのが、まだ30代に見える若いペドロ・チャベス・サンチェス代表理事。開口一番、「村には世界中から記者が来て、もうたくさん報道されている。この間も仲間がオランダまで行って話をしてきたところだ。これまでの経緯などは、新聞記事など読んでもらえばいい」という。なので、これまでの経緯は、新聞や本の記述を参考に、以下に再構成させていただく。

森林を守るために蜂起

チェランの主要産業は農業と林業である。山地には商業価値の高い巨木が豊富にあった。それが、2006年ごろから犯罪グループ来て、無秩序に伐採して運び出すようになった。ファミリア・ミチョアカナにつながる犯罪組織で、それぞれの地域で金になるとみればなんにでも手を出していたのだ。当時の町長は、組織から資金を得て当選していたので、伐採許可を乱発していた。さらに地理的に沿岸部と州都を結ぶ要衝にあたることから、覚せい剤などを運ぶ中継地としても利用された。

組織と結託した町長は、住民が問題を訴えても取り合おうとしなかった。豊かな森林が次々に丸裸にされ、何十台ものトラックが丸太を積んで運び出すのを目にした住民たちは、実力で阻止しようとしたが、リーダーらは次々に殺害されたり行方不明にされたりした。

業を煮やした住民の女性グループが、2011年4月15日早朝、道路にバリケードを築き、伐採業者のトラックを捕まえ、乗っていた武装した男らを拘束した。急を知らせるために教会の鐘が打ち鳴らされ、住民たちは手に手にマチューテ(山刀)をつかんで駆け付けた。警察官らもやってきたが、彼らは犯罪者の味方をして解放しようとしたので、住民と警察官との間での争いとなった。住民のひとりが花火に火をつけ、犯罪者らに向けて発射したのが命中し、慌てた男らはトラックを捨て、走って逃げ出したという。

その夜以来、住民らは地区ごとに組織化し、町の入り口すべてにバリケードを築き、たき火を焚いて犯罪者が戻って来ないか、交代で一晩中見張るようになった。警察も町長ら政治家も、組織犯罪とグルダとして町から追い出した。町に入る3つの街道の入り口には検問所を設け、入ってくるすべての車両に、何の用事でどこへ行くのかたずね、不審車両をチェックした。村人自身による共同体警察が組織され、さらに違法伐採や山火事などを防ぐために森林パトロール隊も創設された。政党は住民を分断するだけだと、各政党を代表する政治家は追い出し、行政区内での政党活動は禁止した。そうして、憲法で保障された先住民族としての「伝統と慣習」による自治に回帰することを宣言した。

選挙は拳手で

「伝統と慣習」による自治とはどういうものか？ まず異なるのが選挙のスタイルである。投票箱に無記名で投票するのではなく、広場で住民全員が見守る中、選挙権のある男女が、候補者のなかから挙手

によって自分たちの代表を決める。共同体の最高決定機関は住民総会で、4つの地区の代表者3人ずつからなる理事会(Consejo Mayor)が日常的な業務を行う。司法においても、軽犯罪の場合は自分たちで裁くことができ、泥酔者や飲酒運転犯などは町内の留置所に拘留され、罰金やゴミ収集などの労働奉仕の刑が処せられることもある。重犯罪の場合は、州の司法当局に引き渡すことになるが、よそ者の警察官を追い出し、共同体警察が治安をつかさどるようになってからは殺人や誘拐といった凶悪犯罪はなくなったという。

2012年には大統領選挙が行われたが、チェランでは投票しないと決め、代わりに村でお祭りを催した。もちろん国政への投票は国民の権利なので、「投票に行きたい人は行ってよい」とチャベス・サンチェス代表理事。「しかしそういう人は、ここではあまり好感をもって見られない」。それでも、政府の補助金やプロジェクトを得るうえでは何の問題もない、という。

しかし「伝統と慣習」による自治は、すぐには承認されなかった。州政府によって拒否され、最高裁判所にまで訴え、住民による自治と自己決定の権利が認められたのは2014年5月のことである。犯罪組織による攻撃も続いた。行方不明になったままの人



5人、殺害された人は18人にも上った。その間、地元のカトリック神父らは住民を支援し、精神的に支えてくれた。さらに海外メディアが注目し始め、広く報道されるようになったことから、政府も対応を余儀なくされた面もある。サパティスタの先住民運動の流れをくむチェランの挑戦には、町の郊外にある教員養成大学の左翼学生たちもかかわっているのではないかと思っただが、チャベス・サンチェス代表理事は、「彼らは彼らだ。関係ない」と言下に否定した。

植林で持続的発展を

町役場を出て、市場を散策していると、共同体警察のメンバーに出会ったので、話を聞かせてもらった。ウゴ・サンチェスは27歳で、職場ではウィリーと呼ばれているという。無線などで呼び合うときに、敵から個人が特定されないようにそれぞれ呼び名がつけられているのだ。もともとは建設作業員だったが、2011年の共同体警察の創設時から参加した。

「最初は武器もなくてマチューテだけだった。そのうち銃が与えられ、元軍人だったメンバーから扱い方を習った。最初は毎日パトロールのために2、3時間しか寝る暇がないほどだったが、町を守るためだから、とがんばった。給料は最初の1年間は出ず、生活物資を現品で受け取っていただけだった」という。警察官になって3年で結婚し、今は娘と3人暮らし。家族を養えるだけの給料も出るようにな



共同体警察の「ウィリー」とその娘



った。メキシコのほかの地域とは異なり、ここでは共同体警察は人々から親しまれ、尊敬されているという。

町はずれの町営森林管理センターを訪れてみた。室内には、「薪採集の認可」という張り紙が。共有地の森林から薪を採集したい場合は、管理センターに許可を申請しなければならないのだ。「身分証明書を持参。未成年者には交付しない。トラックの場合は週2回、ワゴン車は週3回まで。生木は採取しない…etc.」。これも町の共有資源を持続的に利用するためなのだ。

センターの脇には、植林のための苗木畑があった。国や州の補助を受けてスギその他の苗木を育てており、犯罪者らに伐採されてしまった山に植林を行っているのだ。2011年から始め、これまでもう100万本を植え、徐々に緑が回復してきた。ミチョアカンではアボカドの栽培が盛んだが、ここでは取り組む予定はないという。アボカド農場は大量に水や農薬を使用し、持続的ではないというのだ。センターの職員らと話をしていると、若者を満載した軽トラックが次々に到着して、周囲は急ににぎやかになった。この日は土曜で、植林作業のために働いた人たちが、給料を受け取るためにやって来たのだった。広大な植林地の維持のために、100人以上が雇われているのだ。植林作業は、植え付けたあと、肥料を入れたり下草を刈ったりと人手がいる。作業員は大部分が10代から20代の若者で、話して

⑥植林作業を終えて戻ってきた若者たち
⑥大地はわれわれのものではない。われわれが大地の一部なのだ

みると、最年少はなんと14歳の中学生。本来は15歳以上でないと働けないのだが、下校後の午後だけ働かせてもらっているという。アメリカに行って不法就労したことがある、という青年もいた。ちなみに給料は、週5日半、2週間で1000ペソ(当時約5500円)。安いが、遠くに行って働くより安全でいいという。若者の雇用創出にもなっているようだ。

チェランでは、町のなかの民家や公共施設の壁に、カラフルな壁画があちこちに描かれている。住民による自治を称えたり、持続的発展を訴えたり、自衛のためのたき火を守る老人たちの絵など。町のことをたずねると、人々は誇らしげに自分たちのたかいややり遂げた仕事を語ってくれた。

犯罪組織が暗躍し、行政も司法も汚職まみれという環境のなかで、平和を取り戻すためには国家の支配から自らを切り離すしかない…それが町の人々が自ら選びとった、逆説的な結論だった。グローバル資本主義が世界中を席卷するなか、住民自治によって持続的発展を目指すチェランは、小さなユートピアにも見える。もちろん実際には、地元での仕事は少なく、アメリカに出稼ぎに行った家族からの送金がなければ、暮らしが成り立たないという現実もある。この小さな町の挑戦を、遠くからでも見守っていきたいと思った。

グアテマラアップデート

セプルサルコ裁判の勝利判決から1年

新川志保子

内戦中、軍によって性暴力・性奴隷とされた女性15人による共同訴訟で加害者2名の有罪を勝ち取った歴史的なセプルサルコ裁判の判決から1年、セプルサルコ村では2月25、26日にその記念行事が開かれた。

25日は「内戦被害者の尊厳回復の日」で、教会でミサが行われ、ハロク・ウ（共同告訴をした女性たちの組織で、マヤ・ケクチ語で「変革」を意味する）のメンバーとビジターとのミーティングなどがあった。

翌26日は判決からちょうど1年を記念し、賠償措置の一つである保健所建設の前段階として、移動クリニックのオープニングが行われた。これには、ハロク・ウの女性たち、青年たち、一般住民千人以上の地域住民が参加した。移動クリニックにはキューバ人医師と看護師が常駐する予定だという。

目を見張る女性たちの変化

この両日にグアテマラシティより参加したレコム
の石川智子さんによると、賠償措置が具体的に動き出したことで、地域もその恩恵を受け、また住民らによるハロク・ウの女性たちへの目も変わってきて



移動クリニックの前に立つ女性たち。彼女たちのおかげで村にクリニックができた

いるとのことだ。オープニングには村から移動クリニックまで女性たちが先頭になって手をつないで歩き（写真参照）、「裁判中はずっとショールで顔を隠していた女性たちは、手を振って、笑顔で、自信と誇りをもって人々に応えています。なんと力強いことでしょうか」。このように、女性たちは裁判に勝利したことで、自分たちに自信を持ち、尊厳をもって生活するようになった。この変化は非常に大きなことだ。また、判決の後、コロンビアやペルーなどこれまで内戦や軍事紛争のあった国の女性組織などから招かれて、ハロク・ウとアリアンサの代表が訪問し、裁判プロセスを共有したりしている。このような活動も女性たちに自信を与え、またより広いコンテキストの中で自分たちに起こったことを理解する機会にもなっている。ハロク・ウは昨年12月にはカトリック大司教人権オフィスのヘラルディ司教人権賞も受賞している。

賠償の履行状況

だが、移動クリニック以外では、賠償はまだほとんど進んではいない。このプロセスを支援しているアリアンサ3団体から話を聞いたが、加害者2名に支払いが命じられた女性たちへの賠償金はまだ払われておらず、また、おそらく彼らには支払い能力もないだろうから、実現はまず無理だろうということ。女性たちはせっかくなこまでがんばって裁判に勝っても、これまでのように極貧状態が続いている。これをなんとかしたいが、例えば議会で彼女たちへの特別年金を作るように働きかけられないか、などの方法を模索しているところだ。

その他の賠償措置で最も重要なのがコミュニティの土地問題の解決だ。そもそも内戦中の軍によるセプルサルコの人々への弾圧は土地問題にその原因があるからだ。これを解決するためには、現在の「所

有者」となっている地主一族と交渉し、土地を寄付してもらおうか政府がこれを買取りコミュニティに渡すかの方法が考えられるが、まだ具体的には動いていない。また、これには六つの政府機関が関わっているので、その調整も難しい。土地問題が解決しないかぎり、他の賠償も実現できないという問題もある。例えば保健所も、土地問題が解決しなければ建設できないために、とりあえず移動クリニックという形をとらざるをえなかった。

このように、裁判の勝利判決で非常にポジティブな成果が出ている反面、重要な賠償の実施が難しいという現実もある。高齢化している女性たちが、一刻も早く物理的にも尊厳のある暮らしができることを願うばかりである。レコムは、今年もハロク・ウに支援金を送り、組織強化等に役立ててもらおうことになっている。

グアテマラを震撼させた オガール・セゲーロ火災

今年3月7日、国が経営する乳幼児と未成年の若者らを保護する施設オガール・セゲーロ（スペイン語で「安全な家」を意味）で火災が発生し、教室の中に閉じ込められていた少女ら30数人が焼け死ぬという事件が起こった。死者の数は最終的に41人になった。焼け死んだ人数の多さもさることながら、その状況がわかるにつれてグアテマラ社会は大きなショックに襲われた。火災が起きてからの施設の対応はひどく、焼け死んだのが誰だったかがなかなかわからず、事故の原因など事件の解明に時間がかかった。捜査が進むにつれて、そして脱走した子どもらの証言などもあって、この施設の中で行われていた恐ろしいことが少しずつ明らかになっていった。

まず、恒常的に中の少年・少女らが虐待されていたこと。施設の職員らからの性暴力もひんぱんにあった。刑務所に少女らを連れて行き強制的に売春させていたという証言もあった。焼け死んだ少女らはこの日施設から脱走したが、警察に連れ戻され、教室に閉じ込められていたのだという。



オガール・セゲーロで焼け死んだ少女たちを追悼して花やろうそくが置かれた中央公園。多くの市民が訪れている

この施設は、2008年、当時のアルバロ・コロン大統領の時に大統領夫人のプロジェクトとしてスタートしたもの。親が育てられない事情があったり、虐待を受けて親元で暮らさないほうがよいと判断された乳幼児から少年・少女までを保護するために作られた。が、施設の虐待に耐えかねて脱走をはかる事件が後を絶たず、2016年にも148人が脱走したという。

また、施設側は収容していた少女の人数と氏名を把握しておらず、最終的に施設に何人の子どもや少年・少女がいたかが不明のままだという。組織犯罪に関わる人身売買があったと指摘する声もある。グアテマラでは軍関係者が関わっている大規模組織犯罪が政府機関に入り込んで活動しているという現実がある。政府はこの点に関して事件の解明に及び腰で、組織犯罪の調査に大きな権限を持つ「グアテマラ無処罰対策国際委員会CICIG」が調査することを拒んでいる。そもそも前大統領ペレス・モリーナが一昨年罷免されたのも、大規模な組織犯罪を自ら統率し巨額の税金を横領していたことが明らかになったからで、この事件を調査したのがCICIGだった。

福祉庁長官とオガール・セゲーロ施設長ら（いずれも事件当時）3名が逮捕され、現在取り調べ中である。が、今後検察と司法がどこまで真実に迫れるかが焦点となる。

ホンジュラス

大西洋沿岸地域の開発プロジェクトが

アフリカ系住民の共同体を脅かす 大西裕子・訳

「ガリフナ民族は二度追放されましたが、また新たな追放に直面しています。国内外の資本が狙っている沿岸地方に居住しているためです」と、ホンジュラス黒人連帯組織（OFRANEH）のコーディネーターのミリアム・ミランダは語る。OFRANEHは、ガリフナ民族共同体の権利を守る団体だ。

最初のアフリカ人は、ヨーロッパ人によって奴隷として連れてこられたサンビセンテ島から追放され、219年前にホンジュラスの大西洋岸に定住した。彼らはその地域に住んでいたカリブの先住民に受け入れられた。その子孫がガリフナ民族である。

現在では、ガリフナ民族には40の共同体があり、ホンジュラスの大西洋（カリブ海）沿岸地域のコルテス県、アトランティーダ県、コロン県、そしてグラシアス・ア・ディオス県にまたがって住んでいる。

ガリフナ人は、1950年代、外国資本によるバナナ・プランテーションが作られてから2009年のクーデターまでの間に受けた弾圧にもかかわらず、これらの沿岸地域の土地の立ち退きを拒み続けた。

「クーデターの後、多国籍企業に開発の権利を与える法律の承認が促進されました。この地域の資源の多くはガリフナ人の土地にあるので、私たちガリフナ人は観光産業の巨大プロジェクト問題だけでなく、鉄鉱山開発やダム開発のための土地の移譲問題にも直面しています」と、ミランダはノティシアス・アリアーダスのインタビューで話した。ミランダはガリフナ民族の土地を守る活動家で、死の脅迫を何度も受けている。

2014年、彼女と7人のOFRANEHメンバーはコロン県バジェシートのガリフナの領土を見廻っていた時、重武装した男達に誘拐された。この地域は麻薬取引の経路として戦略的な位置にあるため、犯罪グループや密輸組織が奪い合っていたのだ。

実際に、麻薬密売人は滑走路を作るために彼らの

土地に侵入していた。ミランダ達はバジェシートのガリフナ人共同体によって5時間後に救出された。

「サンボクリーク共同体のセイバ地区では、二つの川に、水力発電用のダムが作られようとしていますが、この共同体は8年もの間、強固に反対を貫いてきました。また、テラ県にあるクスナとプンタピエドラの共同体のケースでは、鉄鉱山開発の危機に迫られています。トゥルヒーリョ湾には、すでにダムのある川が流れ込んでいます。このような開発の全国的拡大は、先住民だけでなく、ガリフナ民族にも影響を及ぼすに至っています。しかし共同体は川を譲り渡すことを拒否して、ずっと抵抗しています。問題は、共同体のある地域一帯の地方自治体によって承認されて、手続きが進められており、それが共同体間の対立を引き起こしていることです」

米州人権裁判所の判決

ガリフナの人々が直面している問題は、国際法廷にも届いているし、米州機構（OEA）や国連の特別報告官にも伝わっている。

2015年10月、米州人権裁判所は、ガリフナ民族の先祖代々の土地の権利を脅かし、コミュニティの許可もなく、トリウンフォ・デ・ラ・クルスのガリフナ人共同体の所有地を売り、住宅や観光のためのプロジェクトを設置する許可を与えたとして、ホンジュラス国家に対して有罪判決を言い渡した。これは人権裁判所のホンジュラスに対する3度目の判決であるが、先住民の権利に関するものとしては初めてのものだ。

米州人権裁判所は、国が、トリウンフォ・デ・ラ・クルス共同体とその住民に対し、その共同体の共有地の権利を侵害し、共同体所有の土地の境界を定めるという義務を怠ったこと、伝統的な土地として認知され、その占有を保証されている地区について、共同体の共有地の正当な権利を保証しなかった

こと、そして、共同体が諮問する権利を保障しなかったこと、について、ホンジュラス国家は国際的な責任を負う、と判決を下した。そして、その境界を定めた共有地の権利書の作成に着手するように」命じた。

しかしながら、この判決が出て、事態は良くなっていないという。「私たちが無きものにしたいのです。なぜなら、私たちは共有財産や資源が残されている土地に住み、それを守っているからなのです」とミランダは言う。

その例は1885年に作られたテラ県のガリフナ人共同体、バラ・ビエッハだ。ここは、国の機関からずっと見捨てられてきた共同体だ。学校もなければ保健センターもなく、電気も飲料水もない。テラ県の医者や団体が健康管理の支援をするために訪れている。

1998年のハリケーンミッチの後、バラ・ビエッハからはほとんどの住民が国内外へ出てしまった。そしてそこは観光プロジェクトに占拠されてしまい、近隣の5つのガリフナ人共同体に被害を与えた。

2003年、共同体の若者たちは、この先祖代々のガリフナの土地を取り戻し守ることにした。その結果、検察は、国立港湾会社（ENP）の所有とみなされている土地を侵害したとして、共同体を告訴した。2007年、ホンジュラス観光庁（IHT）はENPを通じて、テラ県の検察庁に、国の土地を不法占拠した疑いでバラ・ビエッハの共同体に対する異議を申し立てた。

巨大観光プロジェクト

バラ・ビエッハの巨大観光プロジェクトはインドゥラビーチ&ゴルフリゾートという観光プロジェクトに隣接しているが、この企業は2014年9月と10月に軍隊による立ち退きを扇動したとして、共同体によって訴えられている。バラ・ビエッハの住民は自分たちの家に戻り、再び先祖の土地を取り戻した。軍隊の出動が減った時に、彼らは勇敢にもバラ・ビエッハへ戻り、自分たちの家を再建し、再びそこに住んだのだ。

「私たちは、これら巨大プロジェクトの犠牲者です。この土地は、先祖から贈られたもので、私たちはそれを守っていくことを委ねられたのです」とバ

ラ・ビエッハの支援団体の代表カルロス・カスティージョは語る。インドゥラのような巨大観光プロジェクトがやってくる時は、コミュニティに対して、一緒に協議するのではなく、反対に、絶対に実現しない利益を約束して彼らをだますのだという。「彼らは儲けの何%かを私たちに与えると言っておきながら、さらに今度は私たちが土地を明け渡さなければいけない、と言いだしたのです。これは、私たちに對する不正行為です」「これは少数者のためのプロジェクトであり、利益を得るのは彼らだけです」

テラ湾のインドゥラ複合観光施設は、1億2200万ドルの投資で建設された。ホンジュラス政府が株全体の49%を、残り51%を企業グループが持つ官民合同のものだ。3kmにわたる顧客専用の砂浜があり、18ホールのゴルフ場は大陸でも最も良いゴルフ場のひとつである。

一方、カスティージョと他の共同体のリーダー達は、土地の不法占拠と騒乱罪で告訴されている。彼らは国外に出られず、15日毎に裁判所に出頭しなくてはならず、彼らの裁判は人員不足を理由に2度も延期されている。

「国の役目は投資家を守ることであり、貧しい人々を支えることではないのです。バラ・ビエッハのケースはそんな状況の証明です。政府だけでなく自治体も、私たちの要望に応じてくれるのではなく、その権力を利用して、投資家を助けているのです。米州人権裁判所の判決にもかかわらず、状況は何も変わっていません。国際法を頼りに、すべてのガリフナ人共同体は国を告訴していますが、まだ結果が出ていないのです。国はこの状況に対する態度を変えようとしませんからです」

彼らの組織は、ホンジュラス国家に対して、国際労働機関（ILO）の先住民族に関する169号条約で制定されている事前協議の権利を遵守するように要求している。

この条約は2005年に批准され、先住民族の領土で開発プロジェクトを展開しようとする時は、事前に彼らと協議し合意を得なければならないと謳われている。

http://www.noticiasaliadas.org/objetos/informe/38PE_Informe-Especial-Afros-NA.pdfより

闘士オスカル・ロペスの帰還

「豊かな港」（プエルト・リコ＝PR）と呼ばれる米植民地の島の解放と独立に人生を懸けた闘士オスカル・ロペス＝リバーラ（74）が2017年2月9日、42年ぶりに故郷の島都サンファンに帰還した。と言っても、通常の帰島ではない。5月17日までの3ヶ月余りの残る刑期を娘クラリスの自宅で軟禁生活をしながら勤めるためだ。

オスカルは14歳の時、家族でシカゴに移住、徴兵でヴェトナム戦争に参戦し、戦功を挙げた。だが民族主義に目覚め、シカゴに戻ってからの76年、地下結社「民族解放軍」（FALN）に参加する。FALNは70～80年代、シカゴをはじめ本土で爆弾闘争など武闘を続け、死傷者を出していた。オスカルは殺傷事件には関与しなかったが81年5月シカゴで逮捕され、「米政府打倒の隠謀」で禁錮55年の実刑を科せられる。さらに91年、脱獄未遂で15年を追加された。オスカルは99年、クリントン政権から恩赦希望の有無を質されたが拒否、米各地の刑務所で刑期の半分に当たる35年間を過ごした。

「米国の巖窟王」オスカルに新たな救いの手を差し伸べたのは、シカゴを長年活動拠点としていたバラク・オバマ前大統領だった。オバマは任期切れ直前の1月17日、刑期の半分を終えたオスカルを4ヶ月後に釈放する政令に署名した。オスカルは弁護士を通じて、「私の解放のため闘ってくれたPR、米国、世界の人民に感謝する」と表明。キューバの元諜報機関員フェルナンド・ゴンサレス（現キューバ人民友好庁副長官）は、「米国で4年間同じ監房にいたが、オスカルの抵抗力、革命家としての質、信念の堅固さに感銘を受けた」と語った。オスカルは米本土で最後に居たインディアナ州テレオート刑務所から娘クラリスに付き添われてPRに帰っ

てきた。サンファンのカルメン・ユリーナ市長は、「オスカルには市の安定職が約束されている」と明かした。

▼ベネズエラの志士の遺骨が 国立霊廟へ

1958年1月23日、ベネズエラのマルコス・ペレス＝ヒメネス軍事独裁政権が民・軍蜂起で倒された。その文民側の立役者は、エル・ナシオナル紙政治記者から国会議員になったファブリシオ・オヘーダ（1929～66）である。ニコラス・マドゥーロ現大統領は独裁打倒59周年の2017年1月23日、オヘーダの遺骨を一般墓地から国立霊廟（パンテノン・ナシオナル）に移し、名誉回復と栄誉授与の盛大な式典を催した。

マドゥーロ大統領は式典で、「人民革命闘争を開始した革命的忠誠心の模範」と讃え、「解放者勲章」を死後叙勲し、遺族に渡した。故ウーゴ・チャベス前大統領が始めた「ボリバリアーナ革命」の政治的作風にオヘーダの生き方が合うのだ。

民主化後の1959年1月下旬、同年元日にキューバ革命を成し遂げたばかりのフィデル・カストロがカラカスを訪問、英雄として迎えられた。オヘーダはフィデルに招かれてキューバに4ヶ月滞在、影響を受け62年議員を辞職し、富裕層支配体制と戦うゲリラ「民族解放軍」（FALN）を結成した。66年にはベネズエラ革命党（PRV）を結党するが、内部から裏切られ同年6月20日、軍部諜報局に逮捕される。拷問され翌日獄中死を遂げるが、当時のラウル・レオニ大統領の政府は「首吊り自殺」と偽って発表した。

エリーアス・ハウア現教育相は、「ファブリシオは権力に居て安閑としていることもできたが、そうすることなく権力を糾弾、闘争の道に入った」と指摘した。

映画「リマ・ブルーハ」が描き出す民衆音楽

ペルーの首都リマ。その都市の中心部を中心に20世紀前半期に形成された民衆音楽がムシカ・クリオーヤだ。20世紀半ばにはショーミュージックとして数々のスターが登場し、ペルーを代表するナショナルな音楽として今日に至っている音楽ジャンルである。しかし2000年代に、リマのバリオと呼ばれる古い下町で、自分たちだけのために昔ながらのムシカ・クリオーヤを奏で続けてきた人々が「再発見」され、大きな衝撃を与えた。その中の企画の一つ、リマの古老たちが歌ったCD「ラ・グラン・レウニオン」が日本でも一部音楽愛好家たちの中で注目を浴びたことを記憶されている方もおられるだろう。その「ラ・グラン・レウニオン」の収録時にプロモーション・ビデオを制作した若手監督ラファエル・ポラールが、その音楽に衝撃を受けて作った音楽ドキュメンタリー映画が、今日紹介する「リマ・ブルーハ(魅惑のリマ):ムシカ・クリオーヤの肖像」(2011)だ。

そんなわけで、「リマ・ブルーハ」は基本的に「ラ・グラン・レウニオン」の歌手たちに焦点を当て、インタビューと彼らのハラナなフィエスタの様子を切り取ることで、バリオで繰り返されてきた音楽のあり方とはどのようなものであったのかを描き出した作品だ。

「音楽はその場を楽しみ共有するためにこそあるもので、相手もいないのにスタジオで録音するなんてもっての外」と考えるおじいちゃんたちを説得し

て録音に成功した「ラ・グラン・レウニオン」であったが、ドキュメンタリーを観る限り、そのような垣根は感じられない自然な日常のパーティの雰囲気を楽しめる。

これまでも幾度か紹介したが、リマのムシカ・

クリオーヤ揺籃の地は、リマの中心部に位置する旧市街周辺及び南部のバランコ、そして北部に位置する港湾都市カヤオにあるバリオと呼ばれた下町であった。20世紀初頭よりそのバリオでフィエスタを彩るパーティ音楽として、そのハラナ(馬鹿騒ぎ)な楽しみの主役として愛された音楽が、バルス、ポルカ、マリネラなどを中心とするムシカ・クリオーヤである。カジェホン

と呼ばれる集合住宅のフィエスタで、または夜の来訪者たちが奏でるセレナータと呼ばれる歌の贈り物によって、この音楽は人々の生活とまさに不可分な強い結びつきとともに愛されてきた。

しかし、音楽というメディアが対面の足かせを離れ、ラジオ、レコード、テレビとその媒体を発展させていく中で、ムシカ・クリオーヤが商業音楽の中でスター歌手を次々と生み出すようになると、聴衆と奏者の間に大きな隔たりが生み出されることとなった。レコードやラジオに合わせて踊ることが一般化する中で、バリオにあったムシカ・クリオーヤ本来の姿は忘れられていった。もちろん、バリオとショーミュージックの世界を往還しながら活躍する音楽家たちは数多くいたが、リマの古いバリオの外に住む人々や新住民たちからはまったく不可視な閉じ



られた音楽世界として、バリオ音楽は今日まで人知れず残ってきたのである。

それ故に、「ラ・グラン・レウニオン」および同時期に並行して世に出された数々のバリオ音楽のCDは、ペルー社会に大きなインパクトを与えた。それは、商業音楽化されたムシカ・クリオーヤとは全く異なるスタイルの音楽としてバリオのムシカ・クリオーヤが生き残っていたこと、バリオの音楽が彼らの接する世界を取り込みその中で

つねにリニューアルし続けてきていたことの両者によるものだ。バリオのムシカ・クリオーヤは、時代時代に合わせて変化しつつ、ショーミュージック化したムシカ・クリオーヤとも全く異なる音楽として人知れず実践され続けてきたのである。文化は固定化すると社会の文脈から外れていく。その意味でバリオ音楽が

今日まで生き残ってきた大きな原動力は、つねに伝統と革新が彼ら自身の中でせめぎ合いながら、日々生まれなおしていたから、といえるだろう。

そのため、この映画では古老に焦点を合わせつつ、それを受け継いでいく若者たちの姿も取り上げている。焦点が当たった若手(といつつすでに中堅音楽家たちであるが)は皆プロの音楽家たちだが、この映画を見れば、その周辺にはカタギの日曜音楽家として活動している若手もいることをしっかりと感じさせてくれる作りになっている。そうして単なる古老たちのノスタルジックな音楽というわけではない、世代を超えて受け継がれる音楽としてこのバリオのムシカ・クリオーヤが存在していること

をしっかりと観るものに印象づけてくれる作りになっている。この作品はムシカ・クリオーヤがこれほどまでに民衆の中にある音楽であった、ということをも明快に描いている。そしてそれは、ムシカ・クリオーヤという音楽が、人々の絆と記憶を再確認するための「場」となっていたことを教えてくれる。

しかし、この作品の素晴らしいところは、「バリオに残されていたムシカ・クリオーヤを記録したドキュメンタリー」という価値のみに限定することができないところである。

市井に生きる人々が、普通の生活の傍らで当然のように受け継いでいる、歌い継いでいる音楽との切り離し難い関わり。かつて世界の多くの民衆音楽がこのようなものであったこと、そして今なお多くの地域でおそらく人知れ



ずこのような営みが実は民衆音楽を支え続けているのだろうということを改めて教えてくれる作品であったということなのである。音楽が人をつなぎ、記憶をつなぎ、しなやかに変化しながら家族や地域の流儀を生み出していく。そのことこそ、「リマ・ブルーハ」がペルーのムシカ・クリオーヤという枠を超えて広く共感を得ることが出来る大きな「魅力」となっている。まさに、「魅惑のリマ(リマ・ブルーハ)」は、観るものを魅了する音楽ドキュメンタリーなのである。

(この「リマ・ブルーハ」は日本語字幕付きで発売されているので興味のある方はぜひ手に取って下さい!)

鯛の白ワインソース

Huachinango Con Salsa de Vino Blanco

ソマリサの読者のみなさんこんにちは。いつもレシピをご覧くださいありがとうございます。今日は魚の料理です。

メキシコは1万1千キロもの海岸線があり、そのおかげで、多くの種類の魚介類を消費しています。さまざまな魚がとれる川や湖もあります。

鯛は、メキシコ人のよく食べる魚のひとつです。ユカタンやカンペチェ、キンタナローといったマヤの人々が住む州でも、鯛をよく食べますが、これらの地域では鯛のことをhuachinangoではなく、rubiaと呼んでいます。

昔のマヤ人は、フライにしたり、レモンや酸っぱい柑橘と塩でマリネにしたりと、多彩な調理法で鯛を食べていました。

砂地につくった穴に埋める料理もあります。穴のなかで火をおこして石を熱し、魚は土器のなかでユ



カタン原産のアチョーテと塩で味をつけておいて、バナナの葉を敷いてふたをして2、3時間置いておくと、ユカタンの海辺の有名料理Tikinixikができます。Tikinixikは鯛や銀ムツ、その他の白身の魚も使っていました。

ということで、今回は鯛の料理です。

■材料 4人分

- ・タイ 4切れ (大きさはお好みで)
- ・白ワイン 2カップ
- ・ホウレンソウ 4把
- ・砂糖 小さじ2杯
- ・バター30グラム
- ・粉末のゴマ お好みの量
- ・水 ホウレンソウをゆでるために約1リットル

■作り方

- 1) ホウレンソウを4つに切ってゆでる
- 2) 鍋でバターを弱火で溶かす
- 3) バターが溶けたら、ワイン1カップを入れ、砂糖を加えて適当なとろみがつくまでよく混ぜる。

- 4) フライパンに魚を置いて、ワインのソースの一部をかけて、弱火であたためる。先ほど使わなかったワイン1カップを加え、フライパンにふたをして、弱火にかける。両面に火が通るように途中で裏返し、さらに弱火で火を通す。
- 5) ワインが足りなければ、適宜加える。魚が焦げないように気を付ける。
- 6) ゆでたホウレンソウをとりだして、ザルで冷ます。水をしぼって、4等分しておく。
- 7) 魚に火が通ったら、平らな皿に置いて、ワインでつくったソースをかける。
- 8) ホウレンソウを皿に飾り、その上にすりごまをかける。最後にレモンを1切れ、飾ってできあがり。

ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み（2017年3月）

小林致広

（1）「壁 NO、架橋 OK」行方不明移民の母親行進

「死の道で生命を探して—ベルタ・カセレスを偲んで」というスローガンのもと、メソアメリカ移民運動（Movimiento Migrante Mesoamericano）などが組織した行方不明移民を探す中米母親たちのキャラバン（2016年11月15日—12月3日）が実施された。グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグアの41名（男性5名）は、チアパス州から入国、タバスコ州からメキシコ湾ルートで北上、メキシコ市を経てオアハカ・チアパス州の太平洋岸ルートを南下した。北部国境のタマウリパス州（2010年、サンフェルナンドで中米移民72名殺害）やソノラ州など13州を巡り、移住者避難所、支援グループ（ラス・パトロナス、記憶の足跡プロジェクトなど）、政府当局者、入管・刑務所・共同墓地などを訪問した。今年の4件の家族再会を含めて12年間で270件の家族再会があったとされる。

カルデロン政権の対ナルコ戦争開始後10年で約10万人がメキシコ国内で行方不明になった。ペニャ・ニエト政権の南部国境計画（2014年開始）による管理・監視強化、軍事化進行により、米国を目指す中米移民はさらなる迫害に直面している。国内17カ所の移民避難所で作る移住者防衛組織記録ネットワークによると、移住者が遭遇した強盗・脅迫・傷害・誘拐など犯罪事件にメキシコ当局が関与している比率は、2014年度は2割だったが2015年には4割まで急増した。未成年者比率が高いのが近年の特徴で、2016年に米国とメキシコから送還されたホンジュラス出身者約8万人中未成年者は約9千人と1割強となっている。12月8日、ベラクルス州南部で衝突したトレーラーのコンテナから110名（未成年者48名）の中米移民が発見されている。

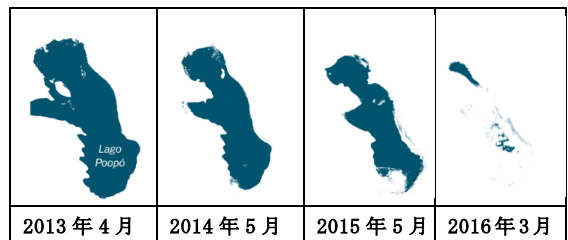


（2）ボリビア第2の湖消滅の危機

2015年12月、ボリビアで2番目に広い面積のポーポ湖（2,237 km²、平均1,000 km²=琵琶湖670 km²）はほぼ干上がった。1933年と1994年以来の水域消滅の主原因は、エル・ニーニョ現象による過去30年で最悪の大旱魃である。同時に、ポーポ湖に流れ込むデサグエロ川の水量が鉱山企業の水汲み上げで激減したことも原因とされる。2014年には湖域の漁業資源が全滅し、漁撈活動をしていた先住民族ウルスの共同体では、鉱山やウユニ塩田への出稼ぎ、アルゼンチンやチリ北部への移住を選択する人が増えた。残った人々は旱魃に強いとされるキヌア栽培やアドベ煉瓦製作に携わっている。

湖西岸オリノカ出身で干上がった湖域を自転車車で横断した経験があるというモラレス大統領は、湖水域は数年で回復と楽観的な見解を表明していた。2017年1月初旬の降雨で湖水域は70%回復と防衛省は発表したが、オルロ州政府によると回復率は10%に過ぎない。大統領自身も降雨による水域回復は一時的で乾燥化が進んでいることを認めている。ボリビア南部の水不足は深刻化し、2016年11月21日、大統領は水不足非常事態宣言を発表し、11月27日にラパス市近郊ラハ村でのアイマラの伝統的な雨乞い儀式に参加した。

北のウルウル湖との間に水路を開削し流入量を確保しても汚染物質が流入するだけで、ラムサール条約保護指定からかけ離れた「死の湖」になるだけである。フラミンゴなど鳥類は湖に戻ってくるかもしれない。しかし、漁業資源を補うため稚魚放流しても、ウルの人々がポーポ湖で漁撈活動を再開できる日が来る可能性はないだろう。



2013年以降のポーポ湖水域の減少

主要出典：<http://www.bbc.com/mundo/noticias-america-latina-38032745>, https://www.youtube.com/watch?v=hU3xaY4_CvQ

主要出典：<https://movimientomigrantemesoamericano.org>

(3) 更なる女性犠牲者をなくせ (Ni una menos)

2016年10月19日、アルゼンチン各地で女性ストライキが行われた。直前のマル・デ・プラタの16歳女性レイプ殺害、ロサリオの第31回女性大会弾圧を受け、アルゼンチンの女性コレクティブ Ni una menos など呼び掛けた行動である。午後1~2時の職場放棄、性暴力や差別への抗議デモが各地で行われ、ブエノスアイレスでは黒い喪服の女性10万人が集結した。呼応するデモはアメリカやヨーロッパなど世界17カ国138都市で実施された。Ni una menos というスローガンのもと、11月25日の「対女性暴力撲滅国際日」や2017年3月8日の国際女性の日には、中南米各地で女性殺害に対する抗議行動が展開されている。



NI UNA MENOS HUELGA DE MUJERES
19 de octubre
13:00 BARRIO Y CESE DE TAREAS DOMESTICAS O DE CERRADO DE CALLES Y LA CALLE
17:00 CONCENTRACION EN EL QUERRECHO NACIONAL EN LA PLAZA
BASTA DE VIOLENCIA MACHISTA
VAMOS VESTIDAS DE NEGRO VIVAS NOS QUEREMOS

女性ストライキのポスター

殺害指数(対女性10万人比)の上位25国中14国はLA諸国だった。2014・15年はホンジュラスが断トツだったが、2016年10月段階ではグアテマラ(630)がホンジュラス(228)を凌ぐ形で急増している。2015年に970件だったコロンビアは、和平合意の2016年は前々年並みに戻った。南米のアルゼンチン、ペルー、ボリビア、ベネズエラでは女性殺害数は増加している。メキシコでは、ナルコ抗争を反映し、長らく女性殺害の代名詞だったシウダー・フアレスに替わって、2012/13年はアカプルコが人数・指数とも1位になった。しかし、2014/15年は、首都近郊エカテペック市が人数で1位となり女性にとって最も危険な都市となった。

	2014	2015	指数		2014	2015	指数
ホンジュラス	531	472	11.5	エクアドル	97	53	0.6
アルゼンチン	225	238	1.0	ボリビア	96		1.8
グアテマラ	217	746	8.6	ペルー	90	95	0.6
ドミニカ	188		3.6	ベネズエラ	74	121	0.8
エルサルバドル	183	159	4.9	プエルトリコ	44		2.3
コロンビア	145	970	3.9	その他計	185		
ブラジル(2013)	4,762		4.8	メキシコ(2014)	2,289		3.2

2014/25年度の女性殺害数と指数(人口10万人当たり)

主要出典：<http://www.telesurtv.net/news/Crimenes-impunes-el-rastro-del-feminicidio-en-America-Latina-20160704-0009.html#>,
<http://www.bbc.com/mundo/noticias-america-latina-37828573>,
<http://karakuru.jp/5839/>

(4) ベネトン社がアルゼンチン最大の大地所有者

2017年1月中旬、Oxfamは「世界の富裕層上位8人の資産は下位50%と同等」という報告を発表した。その2か月前、Oxfamは報告書『追放されたものたち—ラテンアメリカの土地、権力、不平等』において、富や資源の寡占状況は土地所有でも顕著と指摘した。農産物輸出企業の上位1%が所有する農地の比率は、ペルー、チリ、パラグアイでは70%を超え、14国の平均は51.2%で、上位1%の大企業が残りに99%に匹敵する農地を専有している。しかも、近年ではラプラタ流域における大豆生産用の土地取得が顕著で、1990-2014年で「大豆共和国」の面積は3倍になっている。

国名	率	国名	率	国名	率
ペルー	77.1	平均	51.2	コスタリカ	33.9
チリ	74.5	グアテマラ	47.9	エルサルバドル	28.9
パラグアイ	71.3	ブラジル	44.4	ニカラグア	24.6
ボリビア	65.7	ベネズエラ	40.5	エクアドル	22.6
メキシコ	58.0	アルゼンチン	35.9	ウルグアイ	18.9

農産物輸出企業上位1%の土地専有率(Oxfam, 2016)

2011年、アルゼンチンでは外国企業の農地取得上限は行政地区の全農地面積の15%に上げられ、現マクリ政権は外国資本を呼び込むため規制緩和を推進している。現時点では、全農地6%弱の1,588万haが外国企業所有だが、オフショア企業を含めると3,400万haとされる。名義が判明している約600万haのうち370万haは米国系企業、次いでイタリア系企業が144万haとなっている。84万haを所有する衣料企業ベネトン社はアルゼンチン最大の大地所有者である。

その大部分は、ベネトン社がアルゼンチン南部土地会社から1991年に5千万ドルで購入したものである。その土地は、1870-90年代の「砂漠の征服」の過程でアルゼンチン政府が先住民マプーチェから強奪したパタゴニア北部の土地(約97万ha)だった。土地を奪われたマプーチェの人々は先祖伝来の土地を回復する運動を展開してきた。2002年のチュブート州サンタロサ農園を占拠した家族の強制排除後、ベネトン社側は2,500haを国に寄付したが、その土地は不毛の土地だった。2007年から土地返還を求める粘り強い闘争の結果、2014年にサンタロサ・レレンケはマプーチェ先住民共同体として認定された。2015年からプ・ロフ共同体によるベネトン社所有地での土地占拠が始まったが、「テロリスモ」というレッテルのもと強制排除などの強権的な弾圧が続いている。

主要出典：*Oxfam, Desterrados: Tierra, poder y desigualdad en América Latina*, 2016, <http://ploff.net/ba-232-arrancando-el-ano-en-utopicargentina/>, <http://www.rebellion.org/noticia.php?id=222637>

1988年から89年にかけて中米に滞在し、その後13年は毎年1週間ずつ通っていました。最近の15年間はおぶさたしていましたが、今回、勤務先から拒まれつづけていた休職が奇跡的に実現し、久しぶりに長い時間をかけて中米を訪ねます。

能登や熊野、出雲、愛媛の農漁村では、多くの伝統の知恵が、戦争と高度経済成長によって途絶したことを知りました。グアテマラやエルサルバドルの内戦でも、人命だけでなく文化や生業も失われたことでしょう。

内戦が終わって20余年、中米では、伝統農法や先住民族の知恵を再評価する動きがあると聞いています。彼の地の人々のそんな活動と、日本の農漁村の知恵の再生をつなげることができないかなあと、妄想しています。(藤井満)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で7月 日(土)、
発送は関西で7月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.159 グアテマラのアフリカ系

Vol.155 メキシコ・ナルコ街道ゲレロ

Vol.158 コロンビア・和平の陰の暴力

Vol.154 グアテマラ揺るがす関税汚職

Vol.157 ニカラグア・ワスパンの今

Vol.153 コロンビアを伝える旅

Vol.156 グアテマラ戦時下性暴力裁判

Vol.152 グアテマラ視察報告

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・手紙も

しくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

92万2621円

<グアテマラ基金>

110万3521円

(2017年4月現在)